

書評

倉田 稔 著

『ハプスブルク歴史物語』

丹後 杏 一

ハプスブルク帝国の歴史や文化に対する関心の高まりは、学問的な研究あるいは一般的な読書嗜好のいずれの面においても、近年とみに顕著なものがある。ここ数年間に出版された関係の書物は、専門的な研究書や概説書のほか伝記書や趣味的な読物の類までを加えるとひとところには考えられなかった程の量に達し、大都市の大きな書店では特別のコーナーすら設けられている。本書も、当然のことながら、このようなハプスブルク・ブームの中で生み出された所産の一つであり、その中でももっとも簡にして要を得た一冊であるとまずは推賞しておきたい。

巻末の「あとがき」等でみずから言及されているように、著者の本来の専門分野は経済学説史で、早くからヒルファーディングの研究家として知られており、たまたまヒルファーディングがウィーン生れのユダヤ人であったことから、その生誕の地ウィーンに留学させていただきにウィーンとハプスブルクの魅力にひきつけられるようになったということらしい。その点では、ドイツ近代史の分野からハプスブルク帝国史の研究へと移行を遂げられた^ス斯学の先輩矢田俊隆氏の場合と共通しており、そのように考えると、音楽の都ウィーンにはかのセイレーンの魔女さながらに男たちの心をひきつける何か^{アヤ}妖しげな魅力があるのではなかろうか。かく言う評者自身も、ヨーゼフ主義という妙に得体の知れぬ思想潮流の魅力にとりつかれてすでに40年、未だにそれからのがれられない始末である。彫刻家の飯田善国氏も語られているように、ウィーンはまさに女、それもかなりの^{コウ}劫を経た悪女なのであろう。その悪女の深なさけに

とりつかれて、本書の著者と共にハプスブルク史の世界をさまよう一蓮托生感を評者もかみしめたいと思う。

くだらぬ御託^{ゴタクセン}宣ばかりのべたが、そろそろ内容の紹介という本論に入ることにする。230頁余りの全文は七章に分けられ、ハプスブルク家初代のルドルフ一世から第一次大戦の敗北で帝国が解体し、最後の皇帝カール一世が退位亡命するにいたるまでの約七百年の歴史がエピソードなどを織り交ぜながら、簡明かつ興味深く叙述されている。文章もきわめて平明、勿体ぶった表現や研究者のみに通用する難解な術語などは些かも使用されていない。平易な言葉で、しかも短いスタンザの文章で記述されている。この短いスタンザの文章というのが評者などにはおよそ真似のできない芸当で、著者のいかにも江戸っ子らしい、さらっとした歯切れのよい文章作りにはつくづく脱帽させられる次第である。

著者は、この書物の中では、本来の経済学説史という専門の領域を離れ、人物を中心とする物語的世界や学問・芸術を含む文化史の分野に自由に翼を広げて、思う存分歴史を楽しんでおられるかに見受けられる。とりわけ重点がおかれているのは、十八世紀の啓蒙的君主ヨーゼフ二世の改革政治のこと、その悲劇的な挫折の生涯に関する記述、それにモーツァルト、ベートーヴェンからヨハン・シュトラウスやマーラーへといたるウィーンの音楽文化史やいわゆる世紀末ウィーンの学問・芸術に関する記述などであり、おそらく著者はその二次にわたる留学の体験の中で、専門の経済学の領域を超えてかなり広範囲にわたる学問(?)に精進されたものと察せられる。なかでも、ヨーゼフ二世の最初の妻イサベラの死をめぐる事情、ベートーヴェンの政治思想、フロイト思想とのかかわりにおける子殺し事件(1899年)やマゾッホのことなどは類書にあまりとり上げておらず、きわめて興味深い記述と言える。皇帝ヨーゼフ二世については、評者も永年来たずさわってきた研究テーマであり、著者と関心を共有しているだけに、著者が今後どのような形でその関心の深化・発展をはかれるのか、ある種の期待をもって見守りたいところである。最近の若い研究者の間でもとり上げられることの少ないテーマであるだけに、著者がこれまでの

専門領域の枠を敢えて踏み越えて本格的に立ち入られることを希望したいのであるが、如何^{イカガ}なものであろうか。

さて、次に、この書物における各章ごとの具体的な記述内容に立ち入り、評者の能力で認識し得た範囲内での若干の問題点や疑問点を指摘することで、一応の責めを果たしたいと思う。まず、その前提として考慮すべきは、対象を成すハプスブルク帝国の歴史が単なるヨーロッパの一国の歴史たるにとどまらず、中欧から東欧・南欧へと、さらにはイベリア半島にまで及ぶ汎ヨーロッパ的な拡がりを示すということである。まことに、ハプスブルク家の歴史をえがくことは全ヨーロッパの歴史をえがくことに等しいと言える。このような汎ヨーロッパ的な拡がりをもつ王朝国家の歴史を、それも政治や社会経済の歩みだけではなく、多彩にわたった芸術・文化の分野をも含めて、無味乾燥な概説に終わらせずに興味をそそる読物として200頁余の書物にまとめるのはまさに至難の業であろう。そのような難事を何とか達成された著者の御苦心の書物に対し、まことに鳥^オ澁^コがましい次第ながら、以下章別に箇条書で評者なりの要望や苦言などを摘記してみたい。

- ① 第1章の記述には、史実から見て若干疑問の点、あいまいな箇所が散見される。たとえば、フスやフス派の改革運動当時のベーメン王(そして神聖ローマ皇帝)はハプスブルク家ではなく、ルクセンブルク家のヴェンツェル、ジギスムントではなかったか。また、1683年のトルコ軍の第二次ウィーン攻囲戦でのオーストリア側の勝者をオイゲン公とし、カール六世(スペイン王としてカルロス三世を自称)をスペイン生まれとするなどやや不正確な記述が目立つ。さらに、この章では、ハプスブルク家の世界支配^{イトグチ}の緒を作ったマクシミリアン一世の結婚政策やカール五世(スペイン王カロルス一世)の壮大な歴史的意図、そしてルドルフ二世のオカルト趣味などについても、今少し詳細に扱って欲しかったというのが評者の感想である。
- ② 第2章の記述では、主としてヨーゼフ二世に関し、その生誕から政革政治の実践と挫折にいたるまでの歩みが、エピソード^{マジ}交りに興味深く語られている。この点で、女帝マリア・テレジアのみを重視した類書とは一味異なる著

者の個性が強く打ち出されたものとみなしてよいであろう。ここで疑問を提起したいのは、皇太子時代のヨーゼフが忍びのフランス旅行の折りに使用した仮名のことであり、それはパッケンシュタインではなくファルケンシュタインではなかったかと思う。こまかいことのようにであるが、正確にお調べ願いたいところである。なお、「農民の神ヨーゼフ」のイメージを具体化するための一助として、チェコの女流作家ニェムツァヴォーの名作『おばあさん』の中でえがかれているヨーゼフ像などを引用されたならば、読者はさらに鮮明な印象を与えられたことであろう。

- ③ ウィーン古典音楽を扱った第3章の内容がモーツァルトとベートーヴェンを語ることで終わり、シューベルトに言及されることが少ないのはやや物足りぬ感がある。シューベルトこそはもっともウィーン的、オーストリア的な音楽家であり、その意味で、ハプスブルクの歴史を語る上でののがすことのできぬ人物の一人ではないだろうか。
- ④ 第4章の記述内容でも、ナポレオン戦争でのカール大公やヨハン大公の活躍ぶりへの言及が少なく、チロルの英雄アンドレアス・ホーファーに全くふれられていないのは残念である。また、いわゆるビーダーマイアー時代の文化や生活気分について、グリルパルツァーやシュティフターの文学、前記のシューベルトの音楽や名曲「聖夜」の成立事情などを含めて、より多くの叙述がなされてもよかったように思う。
- ⑤ 第5章の記述の中で妙に気になるのは、三月革命の項でしばしば「皇軍」の語が使用されていることである。この表現では何となく戦前の日本軍が連想され易いので、やはり「皇帝軍」とした方が無難であろう。また、ルドルフ皇太子の心中事件についても、最近では心中の事実そのものを疑問視する見解が有力であり、その意味からも、断定を避けていくつかの見方を並記した方がよくはなかったか。
- ⑥ 第6章の世紀末のウィーンに関する記述は、著者の専門とされる時期であるだけに、さまざまな面から詳細にわたってよくまとめられている。しかし、最後の20世紀のハプスブルク帝国の項は、年表風にではなく、やはり文章で

叙述して欲しかったというのが評者の意見である。

- ⑦ 第7章の記述も簡明によくまとめられており、ほぼ間然するところはない。が、帝国解体後現在にいたるまでの継承諸国の歴史的推移に関する章を別に設けて欲しかった。著者は「おわりに」の文の中で、最近のユーゴ民族紛争について言及されているが、何も旧ユーゴ地域だけではなく、その他の継承諸国にも拡大した形での戦間期以後の大づかみな現代史を付録としてつけ加えるべきではなかったかと考える。
- ⑧ 引用文献の注記や巻末の参考文献表の記述の仕方があまりにも簡略にすぎる。たとえば、『ウィーン』（文芸春秋）の項などは少なくとも森本哲郎という著者名を、シェーファー『アマデウス』の場合などについても出版社名(?)をそれぞれ表記すべきであろう。
- ⑨ 写真や系図・図表類はほどほどに出されてほぼバランスがとれているように思う。それに比べると、地図が少し不足しているような気がする。16世紀のカール五世時代とフランス革命・ナポレオン戦争前後の時期のハプスブルク帝国の地図、それに、できれば第一次大戦後の解体を示す地図を入れて欲しかった。

以上、この書物の内容に関して、評者みずからの能力をもちかえりみず、いろいろと疑問点や問題点などそれこそ言いたい放題のことをのべてきたが、そのぶしつけきわまる言い草の数々につき、まずは御寛恕頂きたいと思う。問題を厳密に追究すればする程疑問が深まるのは当然のこと、そのことがこの書物の価値を些かも^{オトシ}貶めることにはならないのである。若干の疑問点や問題点をかかえているとは言え、この『ハプスブルク歴史物語』は、いくつか出された類書のなかでも、手ぎわよくコンパクトに仕上げられた秀れた書物であると言える。読者はおそらくその平明な文章を通してハプスブルク・オーストリアの歴史の流れを把握した後、さらにより専門的な分野の研究書へと進まれることであろう。その意味で、本書は、「ハプスブルク史入門書」の役を果たすことになろうと思う。是非一読されることをおすすめする。(日本放送協会出版、1994年6月発行)

(九州女子大学教授)